

## 開講拠点 東京・西早稲田(1) 労研

開講機関: 労働科学研究所・早稲田大学規範科学総合研究所: 労働科学研究所

公益財団法人労働科学研究所 北島洋樹

### 1. 労働科学研究所とは

「(前略)正1時に大原氏、白足袋にセットをはいて、はかまをつけて……今から行こうというわけで迎えにきてくれた。二人で夜道を歩いて紡績の中に行った。ところが、ふいに行ったものだから、さあ社長さんがきたというので大きすぎですよ。人間は少ない。監督者はいない。女工さんばかり働いている。いたるところ、女工さんの三分の一はねむっている。九歳、十歳ですよ。そして紡績のリングという機械はこんなに高いんです。目のところにリングのスピンドルがある。それからもうもうとえらいほこり……見えやしない。もうまるで霧の世界に入ったようで、ニメートル先はほとんど見えない。電灯の光はぼんやりしているしね。そこへもってきて加湿している。(中略)それは人工の紡績という生産事業場ではあるけれども、まるで牢獄ですね。

(中略)こうして頭をぶつけてぶつけて目を覚ましていたんだからね。

(中略)歩きながら真剣に語り続けるものだから、僕も感動してしまって『大原さん、やりましょう！ここへきてやりましょう！』というところに来たわけです。(後略)」

これは、労働科学研究所を創設した大原孫三郎(倉敷紡績第二代社長)と暉峻義等(医学・生理学者:労働科学研究所初代所長)が、深夜に抜き打ちで倉敷紡績万寿工場を視察した時のエピソードです。1920年2月のことです。労働科学研究所はこのように誕生しました。以来、94年間、医学、生理学、心理学、工学、社会科学などの学術的基礎を基に、働く人の安全と健康と職場環境の改善のための科学的・実践的な活動を続けています。

(<http://www.isl.or.jp/>)

### 2. 産業安全保健エキスパート養成コースの趣旨

企業活動を取り巻く環境が大きな変化を被っていることから、従来からも行われていた企業の安全保健活動は、コンプライアンス、CSRの視点から捉え直すことが社会的に要請されており、日では安全保健活動は従業員や地域住民に対してのみならず、広く社会に対しても大きな責任として求められるようになりました。そうしたなかで本養成コースは以下のことを目指しています。

・コンプライアンス、CSRのボトムアップ(現場からの)による向上を実現するための経営トップへ

の提言力(企業トップの講義)

- ・知識を机上のものとしてではなく具体的に業務に活かしていく発想力とそのためコミュニケーション力(グループ討議, ケーススタディ)
- ・複合化、多様化しているリスクに対応するための、安全、健康、環境の3分野を三位一体として捉えてよりよいパフォーマンスを追求していくセンスとバランス力(共通講義)

### 3. 2014 年度の開講実績

2014 年度	科目名	科目 No.	申込者	受講者	修了者	
前期	労働科学	RT421	8	8	7	確定
後期	労働科学特論 a	RT422a	8	8	8	見込
後期	労働科学特論 b	RT422b	13	13	13	見込
後期	労働科学特論 c	RT422c	9	9	8	見込
関連講座	労働科学実習 1	RS422 d	9	9	9	見込

純粹に「知の市場」からの受講者が増加し、全体として受講者は増加傾向にあります。中級コース修了者で上級コース(RS422d)を希望する方が増加しています。

中級コース、上級コースでは、修了者(エキスパート)が講師や、グループワークのファシリテーター、ワークショップの講評者・アドバイザーとして多数参加しています。

上級コース修了者は「産業安全保健エキスパート」として登録され、エキスパートネットワークの活動に参加します。2014 年度も総会(工場見学と実践発表など)、工場見学会、安全衛生大会での情報交換会、その他自主的な情報交換、懇親会など活発に活動しています。

### 4. 今後の課題

中級コースは、安全コース、健康コース、職場環境コースと別れているが、共通講義を設定することで安全・健康・職場環境の三位一体的アプローチの考え方を促進しています。加えて、木、金、土の1日4コマの集中形式や、グループワークを重視した内容から、(1)異業種交流、(2)様々な世代の参加、(3)同じ釜の飯(同期の意識)、などの効果が上がっています。

これらの効果を更に活かし、今後は、(1)受講者の拡大、(2)受講者にとって魅力のあるエキスパート活動の一層の活性化(上級コースへの動機づけ)、(3)エキスパート(上級コース修了者)への継続的な修練環境の提供、を促進します。